

世界史の「周辺」における国家と農民

～南スラヴのナロードニャック、ニコラ・

パシッチとスチェパン・ラディッチ～

越 村 勲

The State and Peasantry in the “Periphery” of
World History ~ Two South-Slav “Narodnjak”-s:
Nikola Pašić and Stjepan Radić ~

Isao Koshimura

はじめに

いわゆる「社会史」の出現は、それ自体多様なあり方を含みながらも、総じて従来の歴史叙述のあり方にたいし、重大な異議申し立てをおこなった。しかし、「社会史」以後のより根本的な問題は、何を叙述するかという点にあり、「民衆」をとうして世界史を再構築していくべきであるという提起がとくに重要であろう。だがここでぶつかる問題は、良知力氏が残していった数々の労作が衝撃的に描き出したように¹⁾、一国の「民衆」が他国の「民衆」をみずから支配、圧迫しうることである。そこで世界史の有機的連関という視点が重要となり、この連関構造のなかで「民衆」を考えることが必要となる。

世界史発展の有機的構造については、I・ウォーラスティンの世界システム論がある。それによれば近代の「ヨーロッパ国際経済」とは西欧を中心としながら他の周辺地域を巻き込んでいく体制であり、そして東欧はこの近代化のなかで16世紀以後、西欧の農業後背地として位置づけられた²⁾。この場合の東欧にロシアは含まれない。なぜなら16・7世紀のロシアは、それ自身中核部分と周辺部分とからなる有機的な地域間分業体制を形づくっており、「ヨーロッパ国際経済」に周辺部分として巻き込まれていなかったからである³⁾。こうして、とくに経済史的な見地からすれば、東欧が最初の非西欧的周辺であったといえる。東欧は他方、民族的連関からすれば、「西のドイツ人と東のロシア人という、数も力も優勢な二大民族にはさまれた軍事的要路」⁴⁾に、中・小の諸民族が重層的に混在する地域である。このように東欧は、西欧とロシ

アにたいし、経済的または民族的に「受け身」の歴史をもち、近代世界史の「民衆」の位置に属してきた。

しかしこの「民衆」は、史上初めて民族的解放をかちとった諸民族の列にも属した。かれらは、最初の主体的「民衆」運動により世界史全体に重大な問題を提起している。まず東欧の運動は、歴史における進歩の問題に関する一つの異議申立てである。近代の発展においては、啓蒙主義の思想が支配的であり、この啓蒙主義が人間の自然にたいする優越にもとづいた「進歩主義」を形づくった。そして人間の自然に対する支配は、自然破壊という結果をも招くようになった。もちろん人類史全体からすれば、自然破壊と自然回帰とが交互にくり返されてきたのだろうが、とくに近代においては自然回帰の側面が押しつぶされてきたと考えられる。(この点、具体的に、農業と工業との関係を見れば一層鮮明になってくる。そして持続的工業優先という問題からすれば、ソヴェト・ロシアといえど啓蒙主義の支配を免れなかったということがわかる。)これにたいし東欧とくに東南欧・バルカンでは、農村の都市に対する抵抗、農業の工業への対抗が歴史的伝統としてまもられてきた。現代ユーゴスラヴィアの人民主義的経済学者ルドルフ・ビチャニッチが、工業優先と共同体の破壊という「近代化」は19世紀の産物であり、農工統一と新しい共同体の創出こそ20世紀的「近代化」である、といった⁵⁾のはこうした東南欧の伝統を背景としていた。ところで、共同体の破壊にはじまった「近代的」人間管理も、従来の進歩史観の産物であると考えたとすれば⁶⁾、こうした人間管理に対するアンチテーゼを提示している点に東欧のもう一つ別の独自性がある。民族が重層的に混在した東欧では権力の分散が不可欠であり、この歴史的土壌から系統的な分権思想が生まれるからである。

以上のような問題意識から本研究では、東欧的直接民主主義の思想と運動を近代史の一つのオルタナティヴとして位置づける。この直接民主主義の運動は、ジャン＝ジャック・ルソー以後人民主義(ポピュリズム)として広く知られ、スラヴ世界では主にナロードニキとして注目された。そしてこの運動は、社会的・民族的の二つの視点から分析することが有益である。ポピュリズムは、対内的に社会的下層を動員し、対外的には民族全体を統合する運動となるとき頂点を迎え、「後発」社会の重大な動因となるからである。こうした視点からすると東南欧のポピュリズムは、主に、セルビア、ブルガリア、さらにクロアチアの三つの類例に大別することができる⁷⁾。具体的に、まずセルビアのポピュリズムは、19世紀初めに反トルコ蜂起の中から生まれ、商人と社会的下層である多数農民による民族独立運動へと発展していった。しかしこのセルビア的ポピュリズムは、ヨーロッパ列強が軍備拡張を競い始め、かつセルビア

自身近代国家の形成を急ぐ中で、次第に大衆の基盤を失っていく。このとき西欧型民主主義の（汚職買収等による）形がい化がすすんだ。他方、主に青年層が担った民族運動は、セルビアの歴史的領土の回復を目標に掲げ、周知のとおりオーストリアとの決裂を招くのであった。以上セルビアの場合、社会的・民族的側面が原初的なかたちで当初結びついてしたが、次第に二つの側面が遊離していった。第二次大戦中再び両側面を結びつけたのは共産党主導の人民民主主義であったといえよう。次にブルガリアの場合は、19世紀後半に民族運動が展開されたが、農民を中心とする社会的下層の動員は、20世紀に入ってようやく実現される。しかしこの動員は、バルカン戦争さらに第一次世界大戦をへて、反戦・国際主義の主流の下で行なわれたため、民族的統合を目標とすることはなかった。二側面が終始結びつかなかった点がブルガリア人民主義の特徴と考えられる。最後にクロアチアの場合は、20世紀初頭、本格的にポピュリズム運動が組織された当初から、農民がナロード（人民）と同一視され、社会的動員と民族的統合との双方が意識的に追及された。また両大戦間期についても、統一ユーゴの中でセルビアのは権主義との対抗上、民族的統合は持続された。そしてとくに1930年代の経済的困難によって、再び農民を中心とした社会的動員が活発となり、こうしてクロアチアではポピュリズムが、第二次大戦中の対独抵抗運動の中でも生きつづけ、戦後ユーゴの農業・民族政策にも影響を与えたと考えられる。

以上のような東南欧のポピュリズムのうち本稿では、セルビアとクロアチアの事例を比較考察することとしたい。この二つのポピュリズムの系譜は、1918年統一以後政府派と反対派の二つの流れとして社会主義ユーゴにも受けつがれている。そして両者具体的争点は、集権か分権か、統一か連邦かであり、とくに東欧的な問題として国家か農民かという二者択一にあった。都築忠七氏はイギリス・オルタナティヴの系譜について述べた際に、「オルタナティヴは、ユートピアのように天をかけめぐるものでも、イデオロギーのように地をはうものでもないが、天と地をつなぐクリティークとして、その両者に似る」⁹⁾、と表現した。本稿の直接のねらいは、まず東南欧の主体的運動がとりうる天と地の幅つまり客観的制約を明らかにすることにあり、そのうえで両者の交錯を検討することである。ここではセルビアとクロアチアのナロードニャックに注目し国家の論理と農民の論理をそれぞれ代弁させることにしたい。前者はセルビアの首相ニコラ・パシッチ（1845～1926）、後者はクロアチア農民党党首スチェパン・ラディッチ（1871～1928）である。両者は思想と生涯だけでなく研究状況も対称的である。パシッチについては彼自身手稿類を残さず、書簡類も世界各国に分散している。しかし1980年代に入り、ロシアに残る書簡類を除いて世界各地の公文書にあた

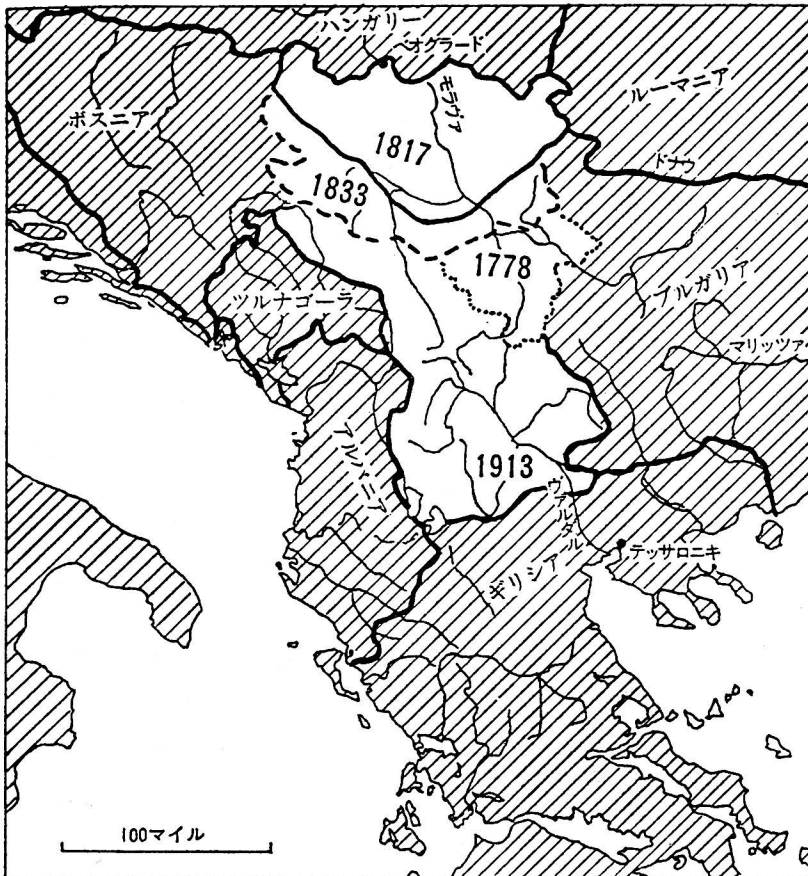
ったうえで客観的なパシッチ研究が著わされた。これにくらべ、ラディッチについては、70年代にも書簡集が編集され、クロアチア資料館等で彼の手稿類を見ることもできるが、代表的なラディッチ研究は未だしもの感がある。そこで本稿では、こうした研究状況の溝もできるだけ埋めながら、問題を検討することにした。

一 ニコラ・パシッチと南スラヴの国家統一

1. チューリヒ留学前後のパシッチ

～社会主義・人民主義そしてセルビアの解放～

ニコラ・パシッチは、セルビアの地方都市ザエチャルにて、農業を営むかたわら商



第1図 セルビアの発展 1814～1913

出典：S. クリソルド編，田中・柴・高田共訳，
『ユーゴスラヴィア史』恒文社 1980，p. 126

人として台頭しつつあった家庭に生まれる。彼の少年期は、セルビア自体が「近代化」の端初につかんとしており、商人層が勃興しようとしていた時期であった。がそれは同時に、農民層の税負担が増加し、他方官僚制が形をととのえていく時代でもあった。こうして農村と都市の対立が土木工学を学ぶ青年期のパシッチ思想形成にも影響を与えた。しかし反トルコの闘いの中から自ら民族的独立をかちとろうとしていたセルビアの青年層にとっては、1860年代すでに民族的解放が社会的問題以上に重要な関心事であった。1866年「統一セルビア青年」が創設され、セルビア民族の精神的統一を目ざした。若きニコラはこの組織の二回大会に参加したといわれている。そこで当初から民族解放が重要な要素であったパシッチ人民主義を検討する際には、セルビア独特の、ロシアとも異なった背景をふまえておく必要があるだろう。一般に、東欧の人民主義は、まさに「周辺」のポピュリストとして、「後発」した者がもつ特徴を帯びている。ロシアのナロードニキたちは西欧社会主義を先例としたが、東欧のポピュリストたちは西欧社会主義に加えこのロシア・ナロードニキをも先例としていた。つまり東欧のナロードニキたちは、西欧とロシアの両方の進路から学びながら自民族なりの方向を模索しようとした点を注目しておくべきであろう⁹⁾。例えばのちにルーマニアに加わるベッサラビアのポピュリスト、ステレはいわば立憲的ナロードニキであり、ロシアとも異なるルーマニア的人民主義ポラニズムの礎を築いた。一方セルビアではスヴェトザル・マルコヴィッチが、チェルヌイシェフスキーとインターナショナル、ナロードニキと社会主義の狭間で、セルビア独自の共同体ザドルガを中心とする社会発展と同時に国際主義的立場からバルカン連邦をつくる、という方向を追求した。そして土木工学を修めるべく国費留学生としてチューリヒに赴いたパシッチは、まずバクーニンと出会うが、それ以上にマルコヴィッチの影響を強く受けることになる。そこで、ポピュリスト・パシッチを論ずる場合、ポピュリズムは東欧的特性を含めた、より広い概念としてみていくことが必要である。

ニコラは1868年チューリヒに着き、10月理工科大学に入学するが、翌69年初めマルコヴィッチがチューリヒにやってくる。当時セルビア人留学生の間ではバクーニンの影響が絶大であったが、パシッチはマルコヴィッチに傾倒していった。このときセルビア青年の大半はロマン主義的愛国心に支配され、啓蒙的で西欧社会主義の要素をもつマルコヴィッチ・グループの「社会的解放と民族的統一の一体性」の主張を受け入れることは困難であった。彼らに比べ当時のパシッチは、セルビアの民族的解放を南スラヴ全体の民族的解放の中で考えていた。その背景として彼は、チェコの民俗学者シャファルジークの理論に影響されており、セルビアとクロアチアの言語が同一であ

る以上両者は同一民族であると考えていた¹⁰⁾。そして中世セルビアに回帰するロマン主義的傾向に対して、19世紀前半の闘争に民族精神の証左をみようとした¹¹⁾のである。

こうして同国人青年に比べれば一歩西欧派に近づいていたパシッチではあったが、チューリヒ当時の思想は未だ形成途上にあって、西欧社会主義者の誕生とも言い切れない。ただおぼろげに形をなしているのは、セルビア内政の民主化と東南欧に一つの民族間協力をつくることとは表裏一体をなすという主張¹²⁾であったろう。

1872年ベオグラードに戻ったパシッチは、鉄道建設で民衆と接触するなかで政治意識を高め、ロシアのあるナロードニキの後押しを受け新聞編集に携るなかで、新しい政治組織を創設する必要性を痛感しはじめた。そしてこの頃、インターナショナルにセルビア蜂起への援助を断われたことを契機に、彼は社会主義的目標を排し、急進主義を標榜する急進党を創設して、セルビア青年に「具体的行動」を呼びかけた。この当時の「人民主義者パシッチ」をS・スコリッチは次のように分析している¹³⁾。この頃のパシッチは、国家を共同体の連合とみなし、この共同体こそスラヴ世界の真髄であり、死に瀕する西欧社会に未来を対峙させるものと考えた。とりわけセルビアのザドルガは、ロシアのミールに匹敵するもの、と彼は位置づけた。が、同時に彼は、間接的ながらマルクス思想にも触れており、資本主義発展の現状を見過ごさず、セルビアにもその波及が不可避であることを自覚していた。例えばパシッチは1872年、セルビアはこの試練を受けなければ国際的に孤立するおそれがあり、鉄道敷設も工業化も受け入れるべきだ、と当時の文化相に具申している。但し、マルクス思想の「理性」に対し、彼が「個人の主体性」を強調した点にやはり人民主義的特徴を見ることができだろうし、さらにパシッチが、資本主義はその国の市民に対して非人間的であるだけでなく他の国々の人々にはもっと非人間的でありうる、と洞察したことが興味深い。何よりセルビア人はトルコから自らを解き放ち、民主国家をつくりあげた点では、ロシアの国民を凌駕していると当時のパシッチは確信していた。セルビアでは人民の主権、統治の威厳にとって最も肝要な前提条件が備わっており、不断の啓発に努めさえすればよい、とも。このようなパシッチの楽観は1875年ベオグラードを訪れたロシアの革命家ステピニャック＝クラフチンスキーの証言によっても表づけられる。彼はこのとき農民とセルビア知識人の結びつきの強さに驚いている。そしてこの1875年ボスニアで民衆蜂起が発生し、この「民族革命」を支援すべくパシッチは技術官僚の職をすてて国会議員に立候補するのである。

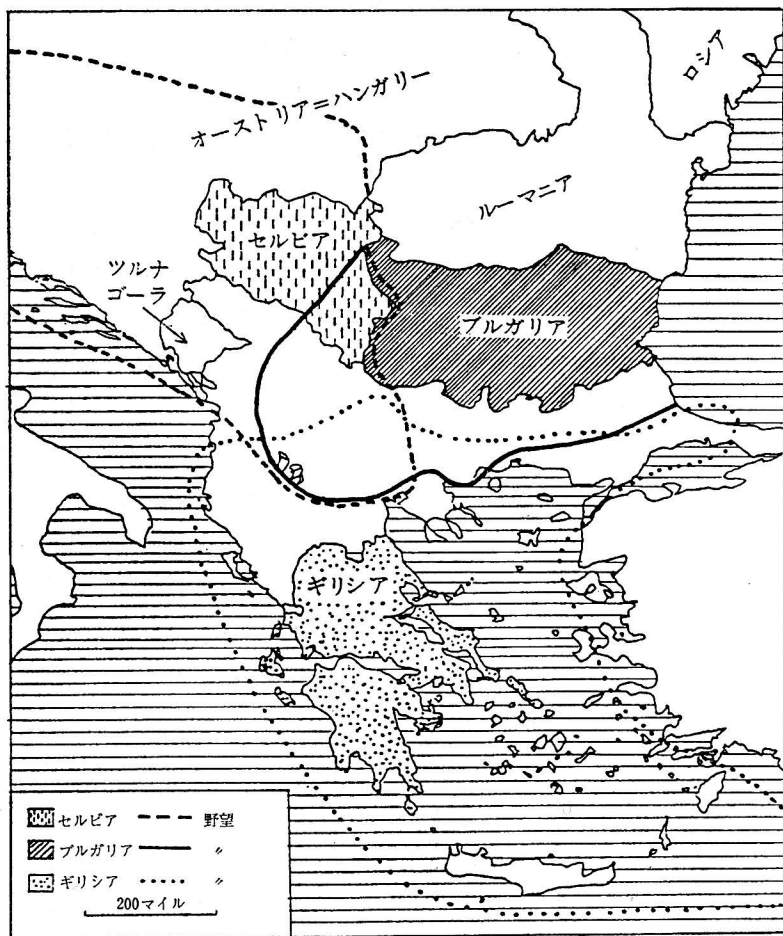
こうして政治的活動に身を投じたパシッチは急進党綱領に次のような所信を込めて

いる。政治的には人民主権と地方自治をめざし、社会的には私有制を廃止し、それに代って農民の協同組合化を図り、農業さらに工業についても協同組合によって振興すべきである、というのが第一の主張である。この時点でパシッチが私有制否定を明言したこと、ザドルガという共同体から協同組合へと社会変革の基盤を移しつつあったことがわかる。他方民族的には、セルビアのブルガリアとの同盟、さらにドナウ連邦の形成を主張している。（このドナウ連邦案とは、古くは1848年革命のハンガリーの指導者コシュートが挫折の中から編みだした思想で、クロアチアの南スラヴ統一思想などによって受けつがれた思想であるが、第一次大戦中のパシッチを評価するにはこのときのドナウ連邦案を憶えておく必要がある。）この当時もパシッチは、民意にもとづいて社会的かつ民族的にセルビアを解放すべきと考えていた。近年客観的パシッチ研究を著したスタンコヴィッチは、協同組合重視と連邦主義、さらにラサールやシュルツェ＝デーリッチの流れを組んだ改良主義思想として当時のパシッチの思想を特徴づけている¹⁴⁾。急進主義がさらに改良主義的になっていく点についてスタンコヴィッチは、1876年セルビアのクラグェヴァツで民衆が政治的自由と自治を求めた「赤旗事件」の挫折後、革命はパシッチにとって象徴的意味しかもたなくなったと指摘している¹⁵⁾。パシッチの政治行動をみても、明確な思想体系を築くよりむしろ次第に「革命性」を現実的効果の追求におきかえていくのである。

変化の直接的な契機は、セルビアの独立が1878年のベルリン会議で国際的に正式承認されたことにあった。そして時あたかもこの年国会議員となったパシッチは、新しい独立国セルビアが組みこまれた78年体制の現実を認識せざるをえなかった。国内ではセルビアがバルカンにおけるピエモンテたらんとする熱狂が世論をおおったが、その一方で78年体制はボスニア統治をオーストリアに委ね、セルビアの西に強大な近代国家が隣接することになった。こうしてパシッチの民族綱領にはセルビア人の住む全地域の統一を当面の課題とする段階的民族解放論があらわれ、彼はオーストリアに対抗すべく、セルビアの近代的国家形成は必須条件であると主張した¹⁶⁾。同時にパシッチは急進党の組織づくりを開始し、権力奪取をめざすよりも大衆との具体的接触に重点をおいた¹⁷⁾。「人民のもとへ」がこの頃の合言葉だった。そして都市の自由派に対しては近代化を民族全体の利益と一致させるよう訴え、国王の専制政治を民意にもとづく政治にかえるよう要求している¹⁸⁾。（この要求は、当時のオブレノヴィッチ王朝が親オーストリア政策をとったことに原因があり、彼のオブレノヴィッチ家との対立は1903年までつづく。）こうした民主化の方向において、急進党の議員候補者は選挙民に公約を訴える最初の政治家になったといわれ、この党は規律などによりセルビア

では初めて「近代的」な組織体制を整えた。

このようにして民衆の支持を得ようとしていた急進党にたいし、1883年の民衆は、軍「近代化」のための武器徴収政策をきっかけとする、反国王の反乱で呼応した。ティモク蜂起はまもなく鎮圧され、パシッチは89年までブルガリア、ルーマニアへの亡命を余儀なくされた。しかしこの亡命は、国際政治の中でのセルビア解放の方策について熟考しうる機会となった。具体的パシッチはセルビア南方への拡張、そしてロシアとの同盟による力の背景という戦略を編み出していく。「南方」とは中世帝国時代セルビアの一部であった旧セルビア地方、ブルガリアとの境界地帯であるマケドニア地方のことである(地図2)。パシッチは旧セルビアを回復し、セルビア軍隊を整備し



第2図 マケドニアをめぐる要求の対立 1912年

出典：同上，p. 146

たうでマケドニアをブルガリアと分けあい、ボスニアを支配するオーストリアに対してはロシアの力を背景にすることで対抗しようとした¹⁹⁾。外政と同様に内政についてもパシッチは現実政治家の度を強めざるをえなかった。パシッチ亡命中セルビア農民の反政府気運は鎮静化して彼らは富有層の影響下に入り、議会は支配層の取引の場となっていた。1889年帰国したパシッチは、翌年国会議員・急進黨党首に復帰し、セルビアは私有財産制と民主制による西欧的近代化の道をすすむべきだ、とこのとき言明している。1891年パシッチは首相となった。しかし彼が青年時代の思想を全て「現実主義化」させたわけではなく、スラヴ主義思想はオブレノヴィッチ家との対立の中でむしろ先鋭化する。彼はロシアの庇護の下で南スラヴを統一すべきだと考えていたが、独自のスラヴ主義思想から南スラヴのあいだでのセルビアの優越性を主張する。それによるとセルビア人は数の上で優勢であるだけでなく、ザドルガ共同体や自治の伝統、スクープシュティナでの合議制をクロアチア以上に保ってきた。またそれ以上に正教が、文化の伝統保持と革新の面でカトリック以上に適しており、ドイツなど「西方」からの文化支配に対抗しようと述べている。政治的には、セルビア人は、かつてのスイス人と同じように、自らの手で民族解放を行い、そのさいやはりとくに貴族も存在せず階層差別もなかった。しかしここで注目すべきことはパシッチがこのセルビアの独立がたえずヨーロッパの情勢に左右されることを認識していた点である²⁰⁾。こうしてパシッチの理想も大国の動向との緊張のなかで「イデオロギー化」していくのである。

パシッチは、1890年代に入るとセルビアの政治において実権を握る立場に辿りついた。総じてセルビアの1890年代は「理論」より「実践」の時代といわれ、他方民族復興のロマン主義が民衆をも覆っていた。急進黨も中世セルビア帝国のゆめを追い、マケドニアやボスニアに対する「民族的使命」を公言するようにもなっていた。この状況のなかではパシッチが保ってきた民主化からスラヴの連帯へという構想も絵空事のようにみえた。国外ではオーストリアがセルビアとクロアチアの対立を助長することに一定成功していたのである。国内でパシッチは複雑な政治関係のなかで、彼をロシアの手先とみる王室とも妥協しながら、セルビア政治の主導権を握ろうと努めていた。だが、「実践」は急進黨の内部分裂を招き、さらに1899年6月の国王ミラン暗殺事件に際し、党指導部解散で自身と党を守ろうとしたことは、一時国民の間で彼の威信を損わせることになる。パシッチは、ようやく1903年のクーデターによりオブレノヴィッチ家の支配が倒されたときになって、アドリア海岸での「静養」からベオグラードの政治舞台に戻るのである。1905年の国会でパシッチは次のように述べた。「……クーデターな

ど政治的混乱のなかでセルビア国家の威信は、国外に住むセルビア人の中で失ついた。しかし我々は再び民主化を勝ちとり、そしてセルビア人全体のピエモンテをいまこそ築きあげよう……」²¹⁾、と。「実践」のみではセルビア政治は支配できなかった。

2. パシッチとユーゴスラヴィア建国

～セルビアの統一と南スラヴの統一～

パシッチはユーゴ建国の父と言えるかという問題がある。この問題についてはユーゴ統一をどれだけ彼自身の目的としていたかがカギになる。これに関しチェコの歴史家M・パウロヴァは南スラヴ全体の統一を「大綱領」、セルビア人の統一を「小綱領」として、第一次大戦末期にパシッチは「大綱領」へ移行したと解釈した²²⁾。その後のパシッチ研究には、両綱領は不可分で「大綱領」の実現なしに「小綱領」の完成もなかったとする説²³⁾、さらに前者を最大限要求とし、後者は絶対に譲れない最小限要求だったとする説²⁴⁾がある。以下では1903年クーデター以後、親ロシアのカラジョルジェヴィッチ王家の帰還とともに、自ら国政を導いていった首相パシッチの行動から検討してみよう。

1903年から1914年まで急進党は議会第一党の地位を守り、その11年間のうち8年間パシッチは首相の座にあった。そして従来基本理念や方針を欠いていた、セルビア外交には間接的にしろう着実にパシッチの理念が反映された。しかし彼は民主化を民族問題解決の糸口とするより、「近代化」を積極的外交政策の前提としはじめた。そして、1903年のパシッチには国家元首としての「責任論」が影を落とす。クーデター直後の国会演説では、自分はもはや理想ではなく現実の必要にもとづいて政治を行う、と言明している²⁵⁾。こうしてパシッチは、いくつかの事件をへて、セルビアの「民族的使命」の旗頭として市民階級をはじめ民族全体の支持を得ていくのである。

最初にオーストリアとの関税戦争がパシッチを小国セルビアのシンボルに仕立てあげた。アルバニア問題をめぐる確執が直接の契機となり、オーストリアはセルビアへの経済封鎖にふみきった。皮肉にもこの出来事は、ともすれば反対意見も押し切って国家機構の整備や経済建設、「近代的」軍隊の建設を急いでいたパシッチに、全民族的支持を与えることになり、セルビアは西欧への輸出によってこの難局を打開することができた。この事件以後パシッチは、クロアチア内の親セルビア勢力やマケドニアの独立運動を重視し、ボスニアの民族運動も極秘に支援した。1906年夏には南スラヴ教師大会が開かれ、およそ600人の参加によって南スラヴ意識が誇示された。こうしてボスニア進出を図るオーストリアの南下政策と高揚しはじめた南スラヴ意識との対

立が次第に激化していった。

ところで、この時 パシッチは 南スラヴ統一を実現可能な 目標とみていたのだろうか。答えは否である。関税戦争の余波は深刻で、頼るべきロシアも日露戦争で痛手を受けていた。何よりセルビア社会はあまりに後進的であった。こうしてパシッチは、現実主義的観測からユーゴ統一を目標にせず、セルビア民族問題の解決を第一の課題とした。但し、彼がこのときも中世セルビア帝国の復活という、ロマン主義的立場をとらなかったことは注目すべきだろう²⁶⁾。後ろ向きのユートピアは否定されていた。

「併合危機」のときパシッチは首相の座になかった。だが、ロシアへの特使としてオーストリアへの対抗を図る役目を与えられ、また帰国後も主戦論の先頭に立ったため、彼の名声はいっそう高まった。1910年政権に返り咲いたパシッチは、「併合危機」でぐらつきかけたロシアとの関係を修復すべく3月国王とともに訪露、同時にロシアを介してブルガリアに圧力をくわえ、翌1911年にはマケドニア分割問題についてブルガリアと直接交渉した。この親露・バルカン同盟策の成功は、急進的民族主義の抬頭につながっていく。12月の党大会でパシッチ自身が、セルビアの民主化とくに王室から独立した政治の確立に成功したことで、バルカンのピエモンテたる前提が整ったと宣言し、軍備拡張のすう勢のなかでウィーンへの対抗上ひきつづき増強をつづけるべきであると訴えた²⁷⁾。そして第一次バルカン戦争以後急進的民族主義は、戦争勝利によってともすれば自民族の利益を重んじ排他的になることもあった。その当時もパシッチは南スラヴの統一気運を保つよう努めているのである。

1912年クマノヴォの戦いの直後、南スラヴ統一気運はおのずから盛りあがった。セルビア軍がマケドニアのスコピエを解放し、またアルバニアへ進駐させたパシッチが撤退を要求するオーストリアとわたりあったことは、否応なく南スラヴ諸民族の自覚を高めたのであった。しかしまもなく反動が訪れる。アルバニアは結局オーストリアの支援をバックに独立し、さらにオーストリアにソルン（テッサロニキ）への出口が与えられたことで、セルビアは領土的危機にさらされた。セルビアは態度を硬化させ、外交は「攻撃性」を帯びる。アルバニアやブルガリアからの脅威が大国によってとりのぞかれなければ、バルカンの同胞といえど自衛のために攻撃するというのはある。こうして第二次バルカン戦争が発生し南スラヴ統一はほぼ実現不可能となった。この戦争にもセルビアは勝利し、威信と（分割されたマケドニアを含む）領土はさらに拡大した。この戦争は東南欧問題の重要性をあらためて認識させ、国際的に「強いセルビア」の重要性が認められた。しかし首相パシッチはなおも「戦いの傷」をいやす必要があると考えていた。内政安定化を理由に、この時併合地域のマケドニア人や

アルバニア人には選挙権も言論の自由もあたえず嚴重に対処した。経済が崩壊し軍隊が疲弊したセルビアには「少なくとも一世代の間」平和が必要だと考え、パシッチは表向きオーストリアとの友好を国会の場で唱えている²⁸⁾。しかしオーストリアは自国内の親セルビアの影響拡大に波止めをかけるべく、アルバニアからのセルビア撤退という最後通ちょうを下す。パシッチはロシアに救いをもとめる。このツァーリとの会見は、南スラヴ統一は単にセルビア一国の利益にかなうのではない、とツァーリに判断させることに成功した。南スラヴの統一はこうしてセルビアの外交プログラムにはじめて加えられ、パシッチも当時それをセルビアの死活問題と理解したのだった。帰国したパシッチは、南スラヴ統一の可能性をロシア訪問で実感したと友人に告白し、以後注意深く南スラヴ統一を求める潮流に支援を与えた²⁹⁾。そして彼が南スラヴ主義者として保護した青年たちのなかに、のちにオーストリア次期皇帝を暗殺するガヴリロ・プリンツィピがいた。

第一次世界大戦勃発に際し、セルビアは早速戦争目的を宣言するという課題に直面した。二度のバルカン戦争をふまえたうえで、パシッチはバルカンにとって重要なのは小国間の勢力均衡ではなくできるだけ強大な統一国家をつくりあげ、ゲルマンの東方進出に対抗すべきだという態度をとった。そして1914年12月7日のニーシュ宣言に向けて国家統一プログラムの法制化にとりかかる。しかしパシッチは他方で、南スラヴ政策を一面的に強調することはセルビア人の統一を危うくすると考え、戦時情勢の不安定を理由に最小限目標としてセルビア人の統一という条項も含ませた。そこで10月27日ニーシュでのユーゴスラヴィア委員会創設にあたって、「統一ユーゴの創設、また状況によってはセルビア人＝クロアチア人の国家」をめざすと表現した³⁰⁾。だが翌々月のニーシュ宣言はユーゴ統一を内外に明言している。この矛盾についてはセルビア世論を統一する必要がある、政治的配慮からあえて宣言に反対しなかったと解釈できる。こうして国際文書の中でユーゴ統一の目標が明確化されて以後、パシッチは「大綱領」を戦略上前面に打ち出していった。それは「宣言」を打ち出した内外の環境を彼が熟慮したことによるだけでなく、現実には他国からの領土割譲要求を斥ける効果もあった。無論この目標の実現可能性は、交戦諸国間の勢力関係に依存していた。時あたかも1915年5月ロンドン協定は「ユーゴ」海岸部の割譲を条件にイタリアの参戦を取りつけた。さらにこの年末、セルビアは懸念されていた軍事的敗化にみまわれた。戦争目的の完全実施には悲観的な見方も現れるようになったが、このときパシッチは国会にたいしひきつづきユーゴ統一目標の堅持を唱え、他方セルビア固有の民族的利害も追求しようとしている。具体的に、(1)セルビア（ボスニアを含む）

の維持、(2)セルビア人諸国の存続、(3)南スラヴ諸国の擁護の三つの目標に分け、現実的に対応しようとした³¹⁾。ただし統一国家形成の場合もセルビアが核になるべきであると彼は強調している。1917年7月政府代表としてパシッチは、ユーゴスラヴィア委員会とともに南スラヴ統一をコルフ島で宣言し、「統一」をセルビアの戦争目的から南スラヴ全体の合意事項とし、さらに1918年にパシッチは戦局の好転とともに南スラヴ統一を強く主張するが、このときもセルビアの主導権は忘れていない。ユーゴ統一が国際問題化したとき、「セルビアは南スラヴの国家」という玉虫色の表現を彼は用いたのである。

さて結局パシッチにとって大・小の綱領はどう関係するのだろうか。評価のポイントには彼の現実主義と青年時代の理念との関連をどう理解するかにある。この点からすれば両綱領が不可分であるとする説も説明として不十分であり、また要求上の序列であるとする説はどちらか一方の面を強調した立場であるにすぎない。パウロヴァの段階説にしても青年時代のセルビア中心思想が消滅したと考えなければ、「小綱領」の放棄は説明できない。むしろ大戦末期、ロシア十月革命によって頼みのツァーリズムが崩壊したあと、英・仏側の反ドイツ構想によって必然的に統一国家が実現することになった時点でも彼がセルビアのヘゲモニーを手放そうとしなかったことが重要である。彼にとっては「大綱領」か「小綱領」かの選択問題ではなく、セルビアへの併合かセルビア主導下の連合かの選択であった。したがってパシッチは統一ユーゴの父であったと言うことはできたとしても、連邦ユーゴの父であったとは言えないだろう。そしてこのセルビアの自負はユーゴ現代史にとって重大な意味をもつのである。

パシッチの連邦制把握については、彼の民族理解、そしてユーゴスラヴィア委員会への対応を検討することが理解の助けとなろう。まず民族理解についてパシッチは、歴史的背景の違いも地方自治を認めることで解消できると考えている。彼は、南スラヴは三つの名前はあるが、血と言語、同一の意識と伝統をもつ一つの民族である、という理解からぬけきれなかったのである。そして団結を最優先させる立場から統一主義を国家組織の原則とし、統一主義からすれば中央集権以外の政体はとりえないのであった。これに対しユーゴスラヴィア委員会は、コルフ協議会の当初、統一よりも有和を強調したが、情勢は「強い」国家を求めたパシッチの立場を有利にし、政体についても連邦制は否定された。セルビア人地域とクロアチア人の地域は分離できない、という考えもこのとき援用された。(但し、このパシッチが、農奴制が残っていた地域での封建制一掃については、ユーゴスラヴィア委員会の代表アンテ・トルンヴィッチ以上に積極的であったことは、青年パシッチの社会主義的要素の残しと見ることが

できよう)。次にユーゴスラヴィア委員会については、パシッチがその創設自体に関与しており、委員会も、セルビア政府との対等、自主性こそ主張していたが、資金等は軍事的見地から援助をつづけるセルビア政府に当初依存していた。しかし1916年頃から資金的に自立し、また「統一はセルビアの拡大にあらず」とのメモにより、一時パシッチとの対立をあらわにした。パシッチの側はこの委員会を統一の一手段としかみず、ごく限られた範囲で独自の役割を認めたにすぎなかった。コルフ協議会ではロシア二月革命などの国際情勢の変化があったため、セルビアの指導性を表面上否定したが、このときも彼はカラジョルジェヴィッチ王朝を統合の象徴としたことで実質的に主導権を守ったのである。

こうして統一ユーゴが成立した。新国家の憲法立案に直接関与しなかったとはいえ、パシッチはセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人は明確に区分することはできないという立場をくり返し、連邦化は力の分散を呼び、国際関係上好ましくないと主張した³²⁾。そして20年11月選挙で連邦派が伸長すると、民主党と連合し「ボリシェヴィキ」や「分離主義者」に対抗する姿勢をとり、まもなく首相となった。国会の議事運営も、コルフ宣言の民族平等原則を考慮に入れずに、多数決で押し切ろうとした。もはやパシッチの態度は戦後の民族状況に合致しなかった。青年時代は広い視野から民族問題を理解したパシッチも、南スラヴ諸族の歴史を単純化する傾向から脱しきれず、このような民族理解にもとづいて統一ユーゴを築こうとしたのである。彼の「イデオロギー」の歴史的役割は終わっていたのである。

二 スチェパン・ラディッチとクロアチア農民運動

1. 青年ラディッチの思想形成

～人民主義と農民主義～

クロアチアは、セルビアと異なり中・東欧の大勢力の中で自治を守ってきた地域である。しかし19世紀後半、ハンガリーの民族主義と対抗するなかで、クロアチア民族の自覚が高まる。このように政治的、社会的発展も異なる地で、スチェパン・ラディッチはパシッチより26年のち「帝国主義の時代」に生まれた。こうして異なった生涯をたどるニコラとスチェパンだが、青年期の人民主義思想については二人とも農民共同体からスラヴの連帯へとつながる構想を共有し、しかも両者の思想とも弱小民族特有の現実主義が加わっていた。以下では第一節でスチェパン・ラディッチの思想形成、そして第二節で統一ユーゴでラディッチが民族的平等を要求していく運動を通して、パシッチとの共通点と相違点を検討してみたい³³⁾。



第3図 オーストリア=ハンガリー帝国とユーゴスラヴィアの関係

ク、はクライン、キ、はキェステンラント、

ザ、はザルツブルク

出典：同上，p. 167

ステパン・ラディッチは、1871年6月11日クロアチア中部の一農村に生まれた。家は独立農家だが貧しく、ステパンも9人兄弟の末子であった。父も母も文字は読めなかった。父親は勤勉で、1ヘクタールの畑を耕す以外に馬車による荷物運搬に仕事の手を広げた。ステパンは生まれつき視力に劣り、父母は彼の読書好きを快く思わなかった。しかし両親の反対を押し切って、ステパンはザグレブのギムナジウムへ進んだ。1883年のことである。ザグレブには、2年前から兄アントンがおり、3歳年上の兄は少ない奨学金を分けて弟を助けた。（この兄弟二人は、その後互いの才能を補いながらひとつになり、クロアチア農民党をつくり出すことになる）。ステパンの向学心は農村や社会への関心と結びつくようになり、第3学年を終えた彼は、クロアチアからセルビアまでを歩いて回り、各地の農民たちが支配層や体制についてどういう考えを持っているか、家々の暮らしや学校また道路の状況について詳細に日記帳

に綴った。彼がこのとき感じとったものはおそらく3年前の農民蜂起の残像であつただろう。83年秋の蜂起はハンガリーの国家権力に対するクロアチア農民の反抗を意味した³⁴⁾。1868年にハンガリーと協定を結び、クロアチアは政治的自治を得たはずだった。しかしそれを支える民族勢力が脆弱で、政治的従属を招き、重大な経済的不利益がこのことによってひき起こされていた。こうして「半植民地」となったクロアチアでは、「国民経済」形成の負担は、圧倒的多数者である農民に、さまざまな税として押し付けられ、このような税の支払いのため、農民たちは土地喪失の危機にさらされた。蜂起をひき起こしたものは、このような国家に対する農民の不信であり、彼らは国家が自分たちの生活を圧迫する以上国家機構の「近代化」に不利益を見出し、そして「マント衆」と呼ばれた役人たちは、混乱のさ中皆殺しの対象とされたのである。

こうしてスチェパンは支配体制への反感を強くする。1888年彼は最初の反政府活動を行い、初めて牢獄を体験する。この年4月30日クロアチア総督クーエン＝ヘーデルヴァーリがオペラ座で英雄ニコラ・ズリンスキーの物語を観劇した。このズリンスキーは、反トルコの英雄とはいえ、クロアチア民族解放の象徴でもあった。スチェパン・ラディッチはこのとき劇場で「ズリンスキーに栄光あれ、暴君ヘーデルヴァーリ打倒」、と二度抗議の叫びを上げた。自宅禁錮の処罰を終えた彼は、91年秋ザグレブ大学法学部へ入学した。大学にはいくつかの政治組織が存在したが、スチェパンは既に独自の思想をもっており、いずれの政治組織にも加わらなかった。彼はいくつかの政党の指導者と親交をもったが、どの政党の理念とも共感を抱くことができなかったのである。ある会食の席でラディッチは、次のように述べた。「私はスタルチェヴィッチ（アンテ、クロアチアの独立権を主張した）の為に、シュトロスマイエ（ヨシブ・ユーライ、南スラヴ諸民族の統一を主張）の為に杯を乾かさない、私はクロアチアとスラヴ全体（Slavenstvo）の為に杯をのみ乾すのだ」³⁵⁾、と。（とくにスタルチェヴィッチとは、彼の党の機関紙が「大衆」紙と銘うっているが内容が複雑で農民にはわかりにくい、と批判して以来不仲となった。）

政治組織には加わらなかったが、スチェパンの政治的活動が停止されたわけではなかった。1895年のクロアチアでは反ハンガリーの政治感情が、10月の皇帝フラニョ・ヨシブのザグレブ訪問とともに、頂点に達した。皇帝はクロアチアにハンガリー支配が浸透したことをその目で確かめようとやってくるのだ、と考えて多くの学生が反対行動を準備していた。一行が中心地のイエラチッチ広場にさしかかったとき、学生たちは1848年の民族的指導者イエラチッチの像の前でハンガリーの国旗に火をつけた。そしてこの学生グループの先頭にスチェパン・ラディッチがいた。彼は裁判の法廷で

判事を徴発したためもあった、この学生グループの中で最も重い刑に服することになる。6カ月の禁固であった。この刑を終えたのち、ステパンは国内での勉学をあきらめ、まずロシアにわたる。彼はモスクワの新聞や雑誌、そして多くの思想家の著作に触れ、自分の批判的精神が、かつて国内の徒歩旅行で芽生え、大学入学直後に訪れたプラハで育ち、そしてこのモスクワで成熟したと感じた。この96年の夏、ステパンはコリェーエフの著作を次から次に読みあさり、ミル自伝のロシア語訳を読了した。ピサーリェフ、プロポーポフなど批評家の著作も買いあさった。制度上の理由でロシアでの就学を断念し、フランスにわたってから、彼はスラヴの連帯と解放の目標を捨てざることはなかった。1897年10月、パリ政治科学自由学校 (École libre des sciences politiques) に入学し、99年には論文「現在のクロアチアと南スラヴ諸民族」を提出して博士号を取得した。こうしてラディッチは、まずプラハでさらにはゼムン (クロアチア、セルビア、ハンガリーの接点) で新聞記者として自立した生活と活動を開始した。この間発表された記事や論文は既に彼の思想の特徴を物語っている。それは、一面で帝国主義の時代を認識した上で、全スラヴの連帯を説くものであり、他面で、西欧的社会主義や形成されつつあったキリスト教社会主義とも一線を画し、人民のなかでも農民たちの活発な政治的自覚に依拠しようとする思想であった。

プラハで、チェコの言語と文化の独自性を要求する運動がプロシアによって圧殺されるのを見たとき、ラディッチはスラヴ連帯の必要を痛感していた。しかし同時にスラヴ諸族それぞれの独自性も認めなければならない。この主張は、諸人民にはすでに強固な社会的下地ができており、それを経済的繁栄や民族的独立のために保護、拡大しなければならないという確信にもとづいていた。そこで、例えば南スラヴ諸族が協力する場合も、各諸族の民族意識が既に成熟している以上、決して統一を強いてはならず、経済的かつ政治的な連邦化の範囲を越えることはできない、とラディッチは主張する³⁶⁾。この時点で彼は、パシッチとは異なったスラヴ連帯思想をもっていた。

人民主義的要素は、ラディッチをクロアチアの知識人とも異なった方向にむかわせた。ステパンは、1901年、人民の生活の中で千年余りの間保たれてきた習慣や歌謡、とくに農民文化に依拠することによって、社会主義者をも含めた「西欧派」と一線を画した。彼は、何より農民の「道徳的、精神的な力」を信じ、また神も信じた。当時社会民主主義に対抗してあるいは進歩的民族主義に相対してキリスト教会の動きが活発になっていた。1900年にはカトリック大集会がザグレブで開かれた。このような動きに対抗してラディッチは反教権主義を主張する。何故なら、彼によれば、教会の中世的偏見は受動的禁欲主義を強制することによって民衆の自由な思考を抑圧し、

健全で積極的なキリスト教の信仰を妨げ、さらに排他的な上級聖職者たちによる民衆の奴隷化を必然的に招くからである⁸⁷⁾。こうして彼はプラハ以後親交の続いていた「現実主義者」と袂を分かち、兄とともに農民運動に携わっていくのである。

文化紙『ドム』に結集したラディッチ兄弟らのグループは、当初少数の孤立した集団であった。しかし、状況はいずれ彼らに力強い支持を与えることになる。ザドルガの崩壊がすすみ、農村人口の流出が始まった。80年代以降、およそ20年のあいだに10万人ほどのクロアチア人が生活困難から海外へ職を求めていった。95年から97年にかけてクロアチアの東部でストライキが頻発した。当時クロアチアにはおよそ20万人の最下層の住民（土地が1エーカーに満たない零細農、徒弟が2人以下の職人、農業・工業プロレタリアート）がいたが、90年代のストライキは、労働運動のギルド的、職人特有の閉鎖性が大きな災いとなって、全土的な広がりを見せることはなかった。しかしそれはクーエン＝ヘーデルヴァーリのハンガリー支配体制に最初の一撃を与え、多くの農民たちにも勇気を与えたのである。

1903年のクロアチア民衆は、財政的自主権を求めてたち上がった。帝国主義間の軍備拡張競争は、農業恐慌の打撃から立ち直っていない農民たちに一層重い税を課した。こうして闘いは農村にまで広がり、この年を通じクロアチアを席卷した。例えばクロアチア北部のザゴリエ地方で蜂起した農民たちはハンガリーの旗をひきちぎり、ハンガリー警察が彼らに向かって発砲したため死者が出ることになる。

この農民蜂起は、ステパン・ラディッチに大きな確信と教訓を与えた。彼は、農民が知識人の指導を待たず、自分たちでたちあがったことに深い感銘を受け、種を蒔くべき畑は既に耕やされている、と確信した。ついに権力の圧制や暴力に対して農民が抵抗を開始し、クロアチアの政治が民主化されようとしている。そして、クロアチアの財政自主権をかちとるためには、まず農民たちの基本的な人権や政治的権利をかちとらなければならない、と彼は考えるようになった。

騒ぎ立つ農民たちにもかかわらず、クロアチアの旧政党は、古い綱領にしがみついていた。1904年3月10日各党有力者が経営に関わっているクロアチア農業銀行の総会が開かれた。席上ステパン・ラディッチは、農民を犠牲にして一人のユダヤ人実業家に不正な融資が行なわれていると告発した。各党代表者は、ラディッチとは同じテーブルにつかない、と騒ぎ立てた。この時ラディッチは、それまで属していたクロアチア権利党を離れ、幾人の同志とともにクロアチア大衆農民党の創設にふみきるのである。1904年の年末から1905年の始めにかけて綱領についての議論が行なわれた。その一致したところは次のようである。クロアチアの政治には指導者の人民への愛情が

なかったわけではないが、それは家父長的な愛情にすぎなかった⁸⁸⁾。つまり民衆が自分の手で運命を決定すべきである、という主張が十分認識されてこなかった。そこで民衆は選挙権を「旦那衆」の「慈悲の恵みとしか考えず、政治闘争への参加も積極的なものではなかった。むしろ民衆は、選挙の度ごとに自分たちの暮らしが厳しくなるのを感じ、政治指導者に対する不信感をつのらせた。政治家たちも外国支配の下で自分たちが為しうることに限界や無力感を感じていた。なかには、民衆に普通選挙権を与え民衆自身が外国支配を倒さねばならないと考える政治家もいるが、しかしこの人々も民衆に対する態度を根本的に改めない限り、目的を達成することはできない。いまや政党を民衆が助けるのではなく、政党が民衆の権利闘争を助けるのでなければならない。「旦那衆」と民衆の間の深い溝を今こそ飛びこえねばならず、そして人民の主権を民衆に、とくに農民に対して認めなければならない。彼らはこの権利に最も目ざめているからである。人民主権以外に我々の政治的かつ民族的無気力から脱却する道はないのである⁸⁹⁾、と新党は宣言した。スラヴ思想の違い以上に、このころパシッチは国家の独立に没頭し、ラディッチは農民の解放を決意した点が重要である。

2. 農民党党首としてのラディッチ

～農民の解放と民族の解放～

1904年の農民党創設以来、14年の第一次大戦勃発までラディッチ兄弟はクロアチア農民の解放思想をつくりあげ、運動に必要な前提をととのえた。二人は、ザドルガに代り協同組合とオプチナを基礎共同体とし、全スラヴの協同にいたる農民的「近代化」を構想した。1918年大戦終了後まもなく兄アントゥンが死去し、スチェパンはクロアチア農民の支持を一身に背負う。彼は首相パシッチには連邦主義を主張しながらも一時これと「和解」し、またクロアチアでは次第に民族支配層とも妥協しながら民族の代表となっていく。そこでここでは連邦制に対する態度や民族理解を中心に、スチェパンの理想主義と現実主義とを検討してみよう。

1904年スチェパンは、『近代的植民とスラヴ人』と題する著作を発表し、近代植民のあるべき姿とスラヴ人の役割を次のように論じた。外国文化を吸収しながらしかも自文化を失わないスラヴ人は、国内・外での植民地化によって人類の文化的・精神的統合をも担いうる。とくにドナウ流域のスラヴ人たちは、一体となってドイツに対抗しなければならない。ドイツ人はドナウ流域を帝国の植民地にしようと考えているからである。ドナウのスラヴ人は、文化的・経済的な意味での自立性を敢然と擁護し、ハンガリーやルーマニアの指導者の視野の狭さを世界に示す必要がある。つぎにこう

して「近代的」植民は政治的のみならず文化的行為でなければならない。この点彼によれば社会民主主義政党は、労働者による権力奪取という政治的目的だけを各国で追求し、世界の平和や人類全体の共通利益を重く見ることはなかった。このような思想はスラヴとは無縁である。スラヴには階級対立が存在しないからである、とステュパンはいう⁴⁰⁾。こうしたスラヴ全体の特徴把握ではパシッチとの隔たりも大きくはない。

つづく1905年『現代ヨーロッパまたはヨーロッパ諸国・諸民族の特徴』で、ステュパンはヨーロッパ史の叙述を試みる。その中でクロアチア・ナショナリズムの始祖として17世紀の聖職者J・クリジャニッチを彼は高く評価する。この人物はカトリックと正教を統一しようとした人物である。正教の優位性を主張したパシッチとは、この点から異なってくる。次にラディッチは、諸民族の政治理念の発展において、ナショナリズムを次のように位置づける。ナショナリズムは愛国主義がより一歩進んだ段階である。それは深く建設的な行為の基になる。ナショナリズムにおいては、蜂起や戦争は多くの手段の一つであり、唯一の闘争手段ではないからである。ナロードニャックは、祖国を愛するものであるが、全ての愛国者が必ず自覚的なナロードニャックとは限らないともいう。西欧ではナショナリズムは、時に自国の政府を反民族的であるという理由で破壊し、それはまた外国勢力への敵対的傾向を生みだす。しかしナロードニャックは、文化的あるいは社会的な意味では異民族を憎悪することもないし、国内でも力による政権奪取を行うことはない。そこでスラヴのナショナリズムは必然的に民主主義に結びつくのである⁴¹⁾、と彼はいう。このような基本理念にもとづいて同年の農民党綱領では次のような方針をあげている。第一に神への信仰が基本になければならない。第二に、合法性が活動の基準となる。第三に人民主権の精神が守らねばならず、そこで人民投票（レフェレンダム）制度を導入する。第四の基本方針は、クロアチアの国家的独立権の獲得である。第五にスラヴの兄弟愛を、また第六に農民の同盟を目ざす。（同時に書かれた綱領解説には党の具体的要求項目が書かれており、その中には、農民については土地相続に伴う税を免除すること、農民に土地や林を分け与えること、天災や家畜伝染病に対する保障を与えること、そして農業信用機関を整備する、という目標が注目される。綱領解説は、最後に、これら党の目標を、集会や新聞などを通じて政治運動を組織し、広く民衆に憲法意識、主権意識を広めることによって達成すべきである、と述べている。） こうしてステュパンは「民族」と「人民」を結合しようとした。

人民の主権と農民の政治、民族の自治とスラヴの連帯がラディッチ農民民主主義論の特徴であった。しかしナショナリズムの意味内容は各国によって異なり、例えばボ

スニア問題を巡って南スラヴ人は互いに対立する。ラディッチはロシアに招かれ、ペトログラードでオーストリアのボスニア併合は歴史的必然によるものであると主張した。即ちヨーロッパという一つの共同体は、ボスニア住民の生命と財産を守りうる秩序を作り上げる権利と義務を負っている以上、この目的に最もふさわしい勢力であるオーストリアに全権を与えたことは正当である、というのである。ラディッチの思想のなかでオーストリア・スラヴ主義の影響が消えずそれがナショナリズムと交差するとき、セルビア民族運動の指導者からは根強い不信感を抱かれるようになった。

オーストリア帝国は、帝国内の弱小民族の自治権を認めるならば、国際関係上の一大勢力として維持されるべきものであった。ラディッチが攻撃したのは、ハンガリーの支配体制であった。そのためラディッチは、独立クロアチアを求めるスタルチェヴィッチの権利党との連合を1909年に提案したのである。クロアチアの独立なしに国政の改革はありえないという彼らと、農民の参加なしに民族解放は実現しえないというラディッチとの違いは、共同の目的のためすえ置かれた。そして1917年夏のラディッチも、戦争がわずかの国境の移動で終わったなら、スロヴェニア人やセルビア人やクロアチア人が住む地域はクロアチア王国として帝国内国家を作るべきだ、と主張した。ただし完全な国境の変更に終るなら、ブルガリア人も含めた全南スラヴ人の国即ちユーゴスラヴィアの誕生となるだろう、が実際国境の大幅な変更はありえないだろう、とクロアチア議会で述べている⁴²⁾。それはまた一部の政治家が、民衆に意志を問うことなく、ユーゴ統一をセルビア王朝の下で実施する合意を結んだことへの痛烈な批判でもあった。

しかしこのあとラディッチは、独立クロアチアを絶対的な目標とするクロアチア権利党と距離をおくようになり、1918年夏には、南スラヴの統一を認めるようになった。ただこの時彼は、崩壊が間近いオーストリア帝国に代りスラヴ相互主義に基づく一大勢力をつくるため、チェコ・ポーランド・ユーゴスラヴィア連合というより広いスラヴの連帯によって南スラヴの統一を保障しようとしたと考えられる。

18年10月5日「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人国民会議」の創設集会が開かれた。ラディッチは、統一と独立を目指すこの会議の中央委員に名を連ねた。21日には農業委員に選ばれた。29日ユーゴ独立が決議された日ラディッチは、「国民会議」が全政党の全権を譲り受けた挙国一致の勢力であると宣言したのに対し、農民の権利のために闘うため依然大衆農民党の旗をかかげることを要求した。「全ての森や牧草地、耕地を人民へ」のスローガンも掲げた。このときも民族の解放と階級の解放を結びつけようとしたのである。「国民会議」で彼は、農民への土地分割と教育改

善、クロアチア議会の権限の明確化、防衛以外で軍隊を使用しないことや動員制限の決議も要求している。農民たちは、土地や森林同様クロアチアの自決権を求めた。ラディッチも「我々クロアチア人は南スラヴ統一の中でクロアチア国家を要求する」⁴³⁾、と宣言した。「国民会議」で彼は訴えた。一つの言語、一つの中央集権国家 それも王制を持つからといって我々が一つの民族であるとはいえない。民衆は「上から」押しつけられた国家など望まない、と。現状はイタリアの侵略を口実に軍剣で民衆を黙らせているにすぎず、イタリアが協商国に後押しされている以上、我々は力をついて対抗するしかない、という口実で民衆をおどしているのである、と彼はいう。クロアチア人はこのおどしにはおどらない。何故ならクロアチアの農民大衆は、中央集権主義にも軍国主義にも反対するからである。彼らは共和国を求め、セルビア人と全民族的に和解することを求める。こうしてラディッチと大衆農民党は、「国民会議」がセルビア政府との「頂上会談」に赴くことを拒否した。そして不当な軍事動員の反対、イタリア部隊の撤退、連邦ユーゴ共和国の樹立、ブルガリア人、チェコ人、ポーランド人との連帯等々を決議した。11月26日「国民会議」はラディッチを除名し、12月には統一ユーゴの独立が最終的に宣言されたのである。

ラディッチは共和主義と平和主義の主張をさらに強め、救いをチェコの指導者たちに求めた。1919年9月マサリクのもとに党の代表を派遣し、ユーゴ国内での事態の進展を知らせ側面からの協力を要請した。国内では内相プリビーチェヴィッチが警察力を動員し、新国家の体制強化を急いでいた。経済困難も手伝い農民の反政府気運が高まるなか、ラディッチはクロアチア共和国の樹立要求を党中央大会で決議させ、事態を重くみた政府は党機関紙の発行を禁止した。大衆農民党は共和国の要求を米大統領ウィルソンに訴えるべく署名活動を開始した。党首ラディッチも外国記者にこの要求を説明し、パリ講和会議で討議されるよう訴えた。

中央政府は3月25日ラディッチ逮捕にふみ切った。講和会議にメモランダムを送ったというのが理由であった。しかしラディッチ自身、メモをパリに送ろうとしたが、この時は果たせなかった。4月ようやくメモが送られ、16万人のクロアチア立憲議会召集の署名もザグレブ近郊に秘かにかくされた。獄中ラディッチは、見張りの目を盗み、クロアチア共和国の構想を手帳に走り書きした⁴⁷⁾。それによるとこの共和国はアメリカ合衆国の保護領となり通貨問題についても合衆国銀行と連携するものであった。さらに彼は記している。共和主義化は、大戦中農民たちの意識が高まり共和制を求めるようになったことにより、革命という事態をへずして行なわれるだろう。むしろ王制をとれば、いずれ革命という民族にとっての悲劇を招くことになる、と。「ク

「クロアチア平和主義共和国」においては、農民が人民の代表として最大の発言力を持ち、労働者は協同組合を通してあらゆる工場を共同所有する。地方自治については、オプチナに代る経済オプチナを導入し強化する、とも。

1920年2月釈放したものの、3月今度はユーゴ統一に反しクロアチア共和国の分離を主張したとして政府は彼を再逮捕。ラディッチは法廷で、クロアチア共和国は人民の願いであると反論した。1920年立憲議会選挙で大衆農民党は23万の得票を得て、クロアチアの第一党となった。一次大戦前の得票、1万数千に比べれば大躍進であった。この年12月大衆農民党は共和農民党と改称して目標をより鮮明にした。ラディッチは立憲議会をボイコットしたが、このことはパシッチが中央集権主義的憲法を通過させることを容易にした。このときクロアチアのある議員は議会での話し合いに応じるよう説得を試みたが、最初から力で問題を解決しようとする勢力と憲法論議などできない、とラディッチは答えている。議会で殺害される可能性があるとも述べている。1923年の国会選挙では共和農民党は47万人の投票をえ、さらにスロヴェニア、ボスニアの勢力とともに連邦主義ブロックを形成した。ラディッチは、次の選挙ではユーゴ全土に共和農民党候補を立候補させ、選挙を通じてセルビア政府を包囲しようと考えた。7月には、パリ・バスティーユ陥落を記念した集会で、ベオグラードとのあらゆる交渉を拒否するとも宣言したのである。

ついに官憲の手が伸びたことを知り、ラディッチはザグレブを離れた。23年8月17日彼はロンドンに到着、ロバート・シートン＝ワトソンに状況を説明した。バルカン委員会、労働党中央委員会、中東協会でも講演したが、クロアチアの共和主義化という目標は受け入れられなかった。このときから彼は、共和化以上に、ユーゴ統一を最優先課題とみなすようになる。ユーゴはセルビア王朝を統合の象徴としながら、一つのコモン・ウェルスをつくるという方向に変化した。ウィーンから国内の党幹部に議会活動の開始を指令したのち、彼は国会休会の間モスクワに滞在し、農民インターナショナルに出席するためソヴェトに向かった。席上クロアチア共和農民党の将来的構想は、チェコの山々からアドリア海までの農民的諸民族によるアドリア＝ドナウ国家連合の形成にある、と表明して農民インターに加盟した。ここでもラディッチは、クロアチアの運動と連動する国際勢力を望んでいたが、農民インターはコミンテルンの一分会であり、農民政策が必ずしも重視されていないことにラディッチは気づいたのである。

国内では野党の動きが活発となり、汚職問題が攻撃の材料となって、パシッチ政府は崩壊した。新政府は、共和農民党に入閣を要請した。帰国したラディッチは、従来

の強権的で腐敗した勢力と戦いながらも、セルビアとの和解を進めることを主張した。和解を妨げたのはパシッチである。彼は共和農民党が公式に共和主義を放棄し現憲法・王制を認めない限り彼らと協力すべきでない、と国王に進言した。ラディッチは共和主義の堅持を宣言し、国際環境からセルビア王朝の存続は認めざるをえないが、国王の権限は国民が決めるべきである、と答えた。国王はラディッチの逮捕を命じた。政府は倒され、パシッチが復活した。だが25年の国会議員選挙も、共和農民党に53万票の支持を集めた。パシッチは全議員の資格はく奪により、共和農民党に対する弾圧を強めた。獄中ラディッチは最終的決断をせまられた。このときパシッチの「実践」とラディッチの「理想」が、鋭利な刃で交錯したといえよう。ステパンに代り甥のパヴレ・ラディッチが、セルビア王朝と現憲法体制を認め、これに国民の意志を反映するよう建設的な努力を行なうことを議会で宣言した。共和農民党は農民党と改められ、パシッチとラディッチの連立政府が誕生した。これに対しクロアチアの一部議員、そして農民党内部からも離脱者が現れた。彼らはこの「転向」を支持することができなかったのである。いずれ、1927年の国会議員選挙でも農民党の支持は38万票にとどまり、むしろクロアチア議員連盟から離脱した人々が予想外に多くの得票を得ることになる。選挙民もラディッチの変化を「転向」と見る者が少なくなかったことになる。しかし以下に示すように、入閣後27年までのラディッチの活動からすれば、必ずしも政治理念が根本的に転換したとはいえないのである。

その間パシッチは急進党の内紛に巻き込まれ、ラディッチは鉄道燃料の流用を摘発して大臣の職を離れ、汚職解消の幅広い運動を準備した。ラディッチは地方を遊説し、現憲法は誤りを含んでいるが国家の基本法であるから尊重しなければいけない、しかし改めるべきところは変更しなければならない、と述べた。「転向」声明より一步憲法修正に含みが込められたといえる。1926年12月、パシッチが81歳で死去した。翌年1月、農民党は急進党との連合を断ち、野党に復帰する。そして議員集会で地方自治強化の目標を掲げた。5月には「転向」の真相が明らかにされた。パシッチは、「転向」か終身刑かのどちらかを選ぶようせまったというのである。政治生命が断たれるよりは得策だと思われるほうを選んだ、とラディッチは自己弁護を試みた。

27年に選挙民から批判されたときも、彼は民衆はいずれ理解するだろうと楽観視していた。この年12月、宿敵でかつての内相プリビーチェヴィッチと反汚職連合を形成した。翌年3月プラハで開かれた国際議員連盟の会合に出席し、フランスと東欧農業諸国の協力を支持した。この時、チェコスロヴァキア指導者クラマーシュがソヴェトとの関係を断つべきと主張したのに対し、人民ロシアであろうとソヴェト・ロシアで

あろうと、我々スラヴにとってロシアは重要である、と反論している。6月誕生日の演説でも政府批判を行ない、ラディッチは国土を四つに分け（東＝セルビア、西＝クロアチアとツルナ・ゴラ、北＝スロヴェニア、南＝マケドニアとセルビアの一部）、各州に経済・文化・社会上の権限を譲渡し、ベオグラードには国家全体に関わる問題に立法・行政権を限定し、人民が全てを自分たちの手にしなければならない以上、クロアチア領土内ではクロアチア人民が完全な権力を得る必要がある、と訴えた。そしてこの主張が、いずれ国会内でのピストル発砲事件（1928年）をよび、ラディッチは銃弾に倒れることになる。

その悲劇的な死によってステパン・ラディッチは死後も永くクロアチアの精神的象徴でありつづける。しかし第一次大戦以後の彼の活動については評価の別れる要因もある。たしかにセルビア中央政府との闘いが最優先されなければならなかったとはいえ、土地改革案は彼がボイコットした議会で可決され、一時的好況のとき下層農民の社会的要求を取り上げる努力も大きくはなかった。民族的闘争が優先されるなかで、

例えばモスクワから帰国したラディッチが、クロアチア支配層との妥協を行った⁴⁵⁾ことも、後世のラディッチ評価に一つの陰をおとすことになったといえよう。

結びにかえて

「政治家」ニコラとステパンとを比較した場合どちらもセルビアとクロアチアの民衆から、生涯をとうしてみれば、絶大な支持を受けた。両者とも人民主義から民族主義の象徴へと変化していくなかで、この民衆支持を保ち続けたのであった。ただユーゴの政治舞台の中で前者は、「理念」よりは「実践」のなかで能力を発揮し、後者は実践の成果よりは理想主義の魅力で民衆をひきつけたのである。

個人的資質や出身階層の違いをのぞけば、二人の思想形成の時期が、あるいは環境が差違の背景になっていた。パシッチは、イタリアやドイツが統一国家を形成する時代の青年層に属し、チューリヒ留学では国際社会主義運動以上にセルビア人民主義から影響をうけた。ラディッチは、農民が外国権力に反抗しはじめた時期、さらにゲルマンに対抗してスラヴが民族的権利を要求するプラハで思想形成を行った。こうして二人の関心は、「セルビア中心」と「全スラヴ」、独立と自治とに分かれていく。

しかしこうした差異も世界史全体からみれば、絶対的なものであったとはいえない。セルビアはトルコを相手に一足早く民衆を巻きこんだ民族解放に成功したが、「帝国主義の時代」に新国家として独立した。そして国際環境に左右されながら、ときに「攻撃的」民族主義を利用して新国家の民意を統一することもあった。他方クロアチ

アも「攻撃的」民族主義の系譜は19世紀よりつづいており、いわゆる「大クロアチア主義」とも共闘を要する局面もあった。だがパシッチもラディッチもこうした傾向に埋没することなく、ユーゴスラヴィアという枠組はくずさなかった。ある意味ではラディッチの「転向」も、パシッチの術策だけでなく「周辺」がおかれた問題をパシッチによって気づかされた結果であるといえるかもしれない。

この「幅」の中で、セルビア人民主義は統一・国家の論理を追求し、クロアチア人民主義は連邦人民・農民の論理を追求したことになる。とくに後者は「周辺」から生まれた積極的な思想であるが、ただ戦間期はこの思想も、セルビア支配層ととの対決に埋没するにつれて、自己破壊していった。本稿に述べたように世界史の「周辺」では、国家の論理がイデオロギーに硬化し、農民の論理もユートピアとしてこれに相対するとき、人民主義も自己破壊しうるのである。

(註)

- 1) 例えば『向こう岸からの世界史』、未来社、1978年、とくに57-77頁参照。
- 2) cf. I. Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European world-Economy in the Sixteenth Century* London, 1974. (川北稔訳), 『近代世界システム』、岩波書店、1981年、I. 134-6頁参照。
- 3) cf. *Ibid.*, pp. 305-7. 同上、II. 216-8頁参照。
- 4) cf. R. Okey, *Eastern Europe 1740-1980*, London, 1980, p. 1. (越村・南塚・田中編訳), 『東欧近代史』、勁草書房、1987年、1頁参照。
- 5) cf. R. Bičanić, "The Effects of War on Rural Yugoslavia" *Geographical Journal*, London. No. 1, 1944, p. 16.
- 6) 義江彰夫, 『歴史の曙から伝統社会の成熟へ』、山川出版社、1987年、449-52頁、参照。
- 7) 同様の指摘については cf. Henry A. Landsberger(ed.), *Rural Protest: Peasant Movements and Social Change*, London, 1974 pp. 278-97.
- 8) 都築忠七編, 『イギリス社会主義思想史』、三省堂、1986年、4頁。
- 9) cf. G. Ionescu and E. Gellner ed., *Populism*. London, 1969, p. 100.
- 10), 11), 12) cf. Đorđe Đ. Stanković, *Nikola Pašić i jugoslovensko pitanje*, Beograd, 1985, Str. 38-41.
- 13) cf. Sofija Skorić, "The Populism of Nikola Pašić: The Zürich Period", *East European Quarterly*, Vol. XIV, No. 4, 1980, pp. 480-3.
- 14), 15) cf. Đ. Đ. Stanković, *op. cit.*, Str. 45-6.
- 16), 17), 18) cf. *Ibid.*, Str. 65-71.
- 19) cf. *Ibid.*, Str. 75.
- 20) cf. *Ibid.*, Str. 78-82.
- 21) *Ibid.*, Str. 88.
- 22) cf. M. Paulova, *Jugoslovenski odbor*, Zagreb, 1925, Str. 28. 29, 398-9, 469.
- 23) cf. Izjava Vase Čubriločića u *Naučnom skupu povodom 50-godišnjice raspada*

Austrougarske monarhije i stvaranja jugoslovenske države, Zagreb, 1969, Str. 86-7.

- 24) cf. D. Šepić, *Italija, saveznici i jugoslovensko pitanje 1914-1918*, Zagreb, 1970, Str. 102. 105.
- 25) cf. Đ. Đ. Stanković, *Op. cit.*, Str. 90.
- 26) cf. *Ibid.*, Str. 100.
- 27) cf. *Ibid.*, Str. 197.
- 28) cf. *Ibid.*, Str. 133.
- 29) cf. *Ibid.*, Str. 139-40.
- 30) cf. *Ibid.*, Str. 151.
- 31) cf. *Ibid.*, Str. 180.
- 32) cf. *Ibid.*, Str. 235.
- 33) ラディッチ兄弟の思想と運動については拙稿「東欧小民族の人民主義」、『ソ連研究』4号 1987年4月, 166-189頁, 参照のこと。
- 34) cf. Manuel Dobos, "The Nagodba and the Peasantry in Croatia-Slavonia", *The Peasantry of Eastern Europe*, pp. 88-95.
- 35) Bogdan Krizman, *Korespondencija Stjepana Radića*, Zagreb, 1972, Str. 27.
- 36), 37) cf. Jaroslav Šidak, Idejno sazrijevanje Stjepana Radića, *Studij iz hrvatske povijesti, XIX stoljeća*, Zagreb, 1973, Str. 384-5.
- 38), 39) cf. Antun i Stjepan Radić, Hrvatska Pučka Seljačka Stranka, *Sabrana Djela Antuna Radića* VII, Str. 11-16.
- 40) cf. Stjepan Radić *Moderna kolonizacija i Slaveni*, Zagreb, 1904, Str. 220-52.
- 41) cf. Isto, *Savremena Evropa*, Zagreb, 1905, Str. 213-22.
- 42) B. Krizman, *op. cit.* Tom I, str. 64,
- 43) Stjepan Radić, *Politički spisi*, Stv. 322.
- 44) B. Krizman, *op. cit.* Tom II, str. 47, 57-8.
- 45) cf. Mira Kolar-Dimitrijević, Put Stjepana Radića u Moskvu i pristup Hrvatske Republikanske Seljačke Stranke u Seljačku Internacionalu, *Časopis za suvremenu povijest* 1972 III, Str. 25.

(こしむら いさを 本学非常勤講師・国際関係)